

卷頭言

「外国映画の字幕」

理事長 新谷 友良

「シベールの日曜日」、この映画を見た人はもう多くないのかもしれません。日本で公開されたのは1963年、50年以上前になります。日本アート・シアター・ギルド(ATG)の活動が始まってすぐのころ、「尼僧ヨアンナ」などに引き続いだ公開され、話題になりました。主人公のフランソワーズを演じたパトリシア・ゴッジの美少女ぶりを今もよく覚えています。

テレビの字幕のことを考えていて、「シベールの日曜日」という映画タイトルを思い出しました。原題はフランス語で「Cybele ou les Dimanches de Ville d'Avray」、直訳すると「シベールとアヴレー町の何回かの日曜日」となります。それを映画配給会社が字幕翻訳を担当した浅川寿子さんがこのような美しい日本語にしたのでしょうか。曇った日曜日の雪が残った公園シーンにぴったり合った、本当にきれいな日本語タイトルです。

タイトルにとどまらず、外国映画の字幕はテレビ字幕などとはずいぶんと違います。セリフをそのまま字幕にするのではなく、はっきりとした翻訳作業があり、その翻訳された日本語が字幕化されています。また、映画字幕は小説などの翻訳とは違って、映像のついたセリフを翻訳するので、映像にあった表出タイミングと表示スペースの制約があります。そのため、映画字幕には「1秒間に4文字」、「ヨコ字幕は13~14文字で2行まで、タテ字幕は10~11文字で2行まで」といった決まりがあると聞きます。

通常の翻訳作業に比べて、文字数に制限がある場合の翻訳は大変むつかしく感じられます。限られた文字数の中でその意味をしっかりと伝えていくためには、語彙を豊富にして、的確な言葉に言い換えなければなりません。外国語をすべてそのまま日本語に翻訳してしまうと、字幕が映像に追いつかなくなってしまいます。また逆に、字幕を何行も表示させると字幕を読みきれないうちに、映像が切り替わってしまいます。

そのような制約のなかで、外国映画には素晴らしい字幕が沢山あります。字幕を見ることで外国語を聞いていることを忘れて、映画の世界に没入できます。そのような名字幕を二つ、三つ。

「There's no place like home.」(お家がいちばん)

「We'll always have Paris.」(君と幸せだったパリの思い出があるさ)

「I'm gonna make him an offer he can't refuse.」(奴に文句は言わさん)